

フィールドワークのはじまり／「新しい地」を巡って

阪田清子

2008年冬。久しぶりに北部へ向かう。数年前から始まった海の埋め立て工事の進展を確かめたかったからだ。どうやら立ち入り禁止の看板は無い様子、車を止め、まだ工事中の埋め立て地を歩く。海までは、なんて遠くなったのだろう。

背後には生活を営む古い集落、眼前には漁を行なう海が見える。昔からずっと変わらず続いてきた光景なのだろう。そして私はそれらの狭間にできた「新しい地」を歩いている。ここには人を感じない。ゆっくり襲ってくる途轍もない「空虚」。この場所の印象だ。この地でどんな未来を想像してゆこう。そんな思いを反芻する。

(「Story-Reclaimed Land」制作ノートより)

まだ生まれて間もないその「新しい地」を歩いたとき、柔らかい地面に足を取られて思うように前に進めなかったことを記憶している。その感覚は、地面を踏みしめているのにフワフワと浮遊しているような。真っ直ぐに進んでいるのに方向を見失うような。自分を支えている足を疑い、覚束無いのは自分なのか地面なのかと思考をも麻痺させた。そして、真っ直ぐに立つことのできる場所はどこにあるのかと探し、海の底に沈んだこの地の地盤を思い落胆した。2008年、「新しい地」を巡るその感覚が骨格となり、沖縄や沖縄にいる自分自身にも思いを重ねた作品「Story-Reclaimed Land」が生まれた。

沖縄本島内は埋め立てが進み、自然のままに残る海岸線もだいぶ少なくなっている。変化していく埋め立て地と関わるようになったのは、私がまだ大学生だった頃にまでさかのぼる。

「ナイチャー」、よく投げかけられる言葉。見ただ目ですぐに分かるのだろう。そして、時々それがきっかけでトラブルが起きる。タクシーに乗ると運転手から絡まれ、目的地までたどり着けずに途中で車を降りることもあった。買い物に行けば声をかけられ、活字には残したくない嫌な思い出もある。日々の生活に苛立ち、一人になりたいと車を走らせてもすぐにたどり着いてしまう海岸は、私にとって閉塞感を感じさせる境界線でしかなかった。それでもなるべくその縁まで行きたいと、

海岸をたどる中で行きついたのが埋め立て地だった。15年ほど前の話である。

土砂で作られた細い道は、海岸から海へと突き出し、さらにその道は遠浅の海をぐるりと一周して巨大なプールを形成する。そしてその囲まれた海の水は循環できずに酷い悪臭を放っていた。今でもその臭いは記憶の風景に纏わり付いている。

「何かを壊し、何かを得ること」。理解しがたいその埋め立ての始まりを縁で眺めながら、心象の境界線も歪んでいくのを感じた。その歪みがどういふものだったのかという説明は難しいのだが、ぎゅっとする胸の痛みとともに密やかな心地よさを受けた感覚は今も覚えている。「新しい地」に興味を持ち始めたのは、それからのことである。

豊見城・糸満・与那原・沖縄・北谷・大宜味。カメラを持ちそこへ通う度、「新しい地」が作られる構造から様々な繋がりを垣間見た。その場所で起こっていることは、その場所だけで完結する問題ではない。社会の切れ端をつかみながら変化する場に立ち会うことは、いまでも続くフィールドワークになっている。



「Story-Reclaimed Land」 2012年

2012年、「新しい地」を巡る制作から4年が経とうとしている。その舞台となった北部の埋め立て地は、今では道路や建物ができ、そして人が生活を始めるようになっていく。物語の始まりは、沈んだ地面を取り戻すために地底へと地盤である琉球石灰岩を掘りに行くところから始まる。“この地でどんな未来を想像してゆこう。” その場所で反芻した想いは、まだ物語の途上にある。

(さかた きよこ／現代美術家)

KIYOKO SAKATA



阪田清子について

2009年の夏「阪田清子・山城知佳子」展・枠の外／状況の中へ（沖縄県立芸術大学付属芸術資料館）に出展された阪田氏の作品「Story-Reclaimed Land N02」の作品が印象に残る。ほぼ中央に忽然と居座る作品の前で「これは一体・・・何という事だ！」口に出してしまうほど大きなインパクトを受けた。タイトルから想像される叙情詩な感情ではなく、ドカーンと強烈アッパーパンチの衝撃”を受けたと言ったほうが適切だろう。

展示場の薄暗い空間ほぼ中央に置かれた木製の机、まるで誰かその机を使って仕事をしているような、舞台のワンシーンの情景である。右端に添えつけられたデスクランプはやや暖かみを帯びて机上をほんのり照らしている。しかし机上には何も置かれてない。誰かが静かな時間の中で執務している風景に見える。ところが、そこにあるべきはずの椅子がない。一体どう言う事だ。椅子はどこへ行った・・・周りを探したが何処にもない。椅子があるべき机の下方には琉球石灰岩の欠けらがびっしりと詰め込まれ、机自体も琉球石灰岩が累積した上に置かれていた。なんと恐ろしい事だ・・・一瞬言葉を失った。

しばらく経って、周辺に目を向けた。椅子はその空間から少し離れた場所に脚が焼き焦げた状態で置かれていた。4本の焼けた不揃いの足は琉球石灰岩の小石で支えていた。椅子は傾きながらろうじて立っていた。座ろうにも座れない。座ったらポッキと崩れてしまいそうな不安が漂う。

机と椅子はそろってはじめてその機能を果たす、

しごく当たり前の事である。ある何者かによって両者は切り離され、机の下は琉球石灰岩で埋め尽くされ機能不全に陥っている。あるべき所にあるべきものが無い、いや取り払われたというべきだろう。机の下方は堅い石で封印され、椅子は離れた場所に焼き焦がれ小石に支えられて立っている。「なんと言う暴力的な・・・」姿であろうか、その痛々しさが十分すぎるほど伝わってくる。阪田は詩人の感性と魂を美術という装置物体で語りかけてきたと・・・。まさしくその作品は他者に放たれたドラマである。見る側にそれぞれの物語の入り口まで誘い、それぞれの立場の物語を語らせるのである。見事としか言いようがない。

今回の特別企画展において阪田は、「Story-Reclaimed Land N02」をリメイクした形で提示した。以前の発表した作品を更に進化させ「埋め立て地」という政治的計画の「変貌する場」をメタファーにして実に多くの事を語らせている。地域社会の人々の生活に与える混乱、開発という名の自然破壊、民意が反映されたとはいえない計画性など、現場から発せらる声なき声が聞こえる。

更に作品はドラマチックに構成され、タイトルを遙かに超える広く普遍性を得た作品となっている。社会のさまざまな状況に反応し「抵抗」と「警告」、「権利の剥奪」「民意の無視」「政治権力の暴力」、「生活者の寄る辺なさ」、「意思の尊厳」「健全な対話とは」など、さまざまな言葉を誘発させ、「不条理」に抗う、強い説得力を備えた質の高い作品となった。

阪田は新潟県生まれ、沖縄県芸大大学院修了後（2001年）も制作の場を沖縄に拠点を置き10数年も活動を続けている。阪田本人が述べているように、沖縄の本島各地の海岸や埋め立て地に足を運び、その現場の状況から思考を深め、「新しい地平」を巡る旅を続けている。故郷を離れ、沖縄の生活文化や風土の違いに戸惑いながらも、素足の感覚で土地の空気や温度を感じ、社会のありように鋭い視線を注いでいる。

これまで外からやってきて「沖縄」を語り、提言し批評する多くの文化人や表現者があった。しかし、このリアリティと普遍性をふまえた内側からの視線はあったらどうか？疑わしい。あったとしても阪田の視線の深度まで届いたらどうか？復帰40年にして思うのである。

さて、今展は特別企画展と位置づけ、急遽展示会を開くことになった。阪田作品「Story-Reclaimed Land N02」が復帰40年の節目に、大きな意味を持つであろうとの思いで企画されたものである。また、現在県立美術館・博物館で開催中の「アジアをつなぐ一境界を生きる女たち」展の作品をはじめ、阪田が出展している「止まったカーテン」と連動して見ることによって、阪田の上質な作品世界の解釈と理解に触れる事が出来るであろう。（画廊主／上原誠勇）

阪田清子 【Sakata Kiyoko】

- 1972年 新潟県生まれ
2001年 沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科修了
現在 沖縄大学・沖縄県立芸術大学 非常勤講師

個展

- 2002年 「モノクロームの魅力 Vol.1」 佐喜眞美術館（沖縄）
2003年 「重なる時・交わらない場所」 exhibit Live & Moris Gallery（東京）
2004年 「重なる時・交わらない場所」 ギャラリーゴトウ（東京）
2006年 「TOKYO FLOWERS」 トーキョーワンダーサイト本郷（東京）
2010年 「阪田清子展 止まったカーテン」 =安保-Friendship=
日米安保改定 50年企画／画廊沖縄（沖縄）
2011年 「例えば一つの部屋」 Gallery Point 1
2012年 「Story-Reclaimed Land」 復帰 40年特別企画／画廊沖縄(沖縄)

グループ展

- 2002年 「フォトネシア・光の記憶 時の果実」 前島アートセンター（沖縄）
2003年 「WANAKIO 2003」 前島エリア（沖縄）
2004年 「トーキョーワンダーウォール 2004」 東京都現代美術館（東京）
2005年 「越後妻有 2005 夏 10 days」 松之山エリア（新潟）
「WANAKIO 2005」 那覇市立久茂地小学校（沖縄）
2006年 「越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭 2006」 松之山エリア（新潟）
「Translocation Recombination Connection」 Pier-2（台湾）
2007年 「Translocation Recombination Connection」 台北国際芸術村（台湾）
「協働スタジオプログラム+ hands」 トーキョーワンダーサイト青山（東京）
「沖縄文化の軌跡 1872-2007」 沖縄県立博物館・美術館（沖縄）
2008年 「沖縄プリズム 1872-2008」 東京国立近代美術館（東京）
2009年 「阪田清子・山城知佳子展 枠の外へ／状況の中へ」
沖縄県立芸術大学 附属芸術資料館展示室（沖縄）
2010年 「VOCA2010」 上野の森美術館（東京）
2012年 「OKINAWA ART in NY」 The NipponGallery（アメリカ）
「アジアをつなぐ一境界を生きる女たち 1984-2012」
福岡アジア美術館（福岡）／沖縄県立博物館・美術館（沖縄）

【パブリックコレクション】 沖縄県立博物館・美術館